

社会言語学

学習院大学文学部教授 徳川^{ちりま}宗賢

新しい旗

社会言語学は、まだ若い学問です。関連する研究は昔もあったのですが、それらを総括する分野として、社会言語学の名のもとに、新しい旗が掲げられました。

二つの分野

言語の研究には、伝統的に、二つの大きな柱が存在していました。

一つは、言語そのものの組立てを考察する分野です。その言語の文法はどんな組織になっているのか、音韻・表記はどうか、語彙はどうなっているのかといった研究です。言語はなんらかの意味を表現しますから、意味の研究もこの分野で研究されるようになりました。言語研究のメインストリームです。

もう一つは、言語そのものの歴史的研究です。ことばは時代とともに変化していくのですから、その変化に目標を据えて研究します。この分野の研究は、元來は、現代語の知識からは理解しにくい古典文献を解説するために始まったと言えます。言語学は比較言語学（歴史言語学）によってはじめて科学として定立したと言われています。言語学の古くからのオーソドックスな研究分野です。

日本語について言えば、上代音韻はどんな風だったのかとか、平安時代の文法はどうだったのかといった研究から出発して、ことばがどのようなプロセスで変化していくかを、主として文献をたどりつつ探求します。

コンピューターの研究

しかし言語の研究が上記の二分野の範囲に止まっているのは、まだ積み残されている領域が結構あるじゃないかとするのが、社会言語学の立場です。

卑近な話題で恐縮ですが、コンピューターの研究を例に考えてみましょう。上記になぞらえれば、第一の立場はコンピューターのハードの研究ということになります。この電子機器はどんな構造になっているのか、どんな部分品から作られているのか、各部品はそれぞれどう接続しているのかといった研究がこれにあたります。

これに対して第二の立場は、コンピューターが歴史的

にどのように展開してきたかの研究にあたるでしょう。真空管の時代から大型コンピューターへ、そしてダウンサイジングの時代へと展開していく、それを追う研究ということになります。

その展開

しかしコンピューターの研究がこれに止まるとは到底考えられません。まずソフトの研究があります。コンピューターをどのように使うのか。コンピューター運用の研究と言えましょう。さらにコンピューターの機能が社会に及ぼす影響についての研究などもあるはずです。これらがコンピューターのハードの分析やその歴史研究の範囲を超えた分野であることは言うまでもありません。たまたまコンピューターを例にしましたが、建築とか行政組織などをとりあげても、まったく同様なことが言えると思います。

そこで社会言語学

話を言語にもどすことにしましょう。つまり言語の研究にも、ハードの分析や歴史研究以外に、それがどのように使われ、社会の中で機能しているかに注目する研究があるはず。ここに社会言語学の立脚点があります。これらのテーマは、心ある言語研究者の、当然の関心事であるはずだと思うのです。

社会言語学は、大ざっぱに表現すれば、言語運用の研究、言語と社会の関わりについての研究と言えましょう。そこには、言語を使う生身の人間が介在するのです。

社会言語学の出発

社会言語学の出発としては、まず一つの社会の中に複数の言語が使われている場合、どのような問題が発生するかという課題設定があったかと思われます。日本語をめぐっては、文語と口語、女性語と男性語、敬体と常体、標準語と方言の併存などの問題が浮かび上がります。多民族社会や征服言語と被圧迫言語が鋭く対立する地域では、これは切実な問題です。それぞれの社会では、どういう人が、どんなメディアを通じて、どんな言語を実際に使っているのか。社会言語学は言語研究の一分野として、このようなテーマに正面から取り組み始めました。

学際的研究

従来推進されてきた社会言語学的研究を顧みると、これらの研究を進めるにあたっては、当然社会学や心理学、また政治学などが積み重ねてきた研究成果や方法に関心を持つことが必要になります。視野が言語障害や幼児期言語に及べば、生理学や医学、また教育学などが関連してくるでしょう。つまり社会言語学は、言語学の中でもいわゆる学際的研究ということになるでしょう。

学際的研究とは、伝統的な学問のディシプリンを越えた研究です。新しいディシプリンを目指す研究とも言えるでしょう。この文章の最初に社会言語学はまだ若い学問だとしましたが、それはそういう意味だったのです。

社会言語学をさして、アヤシゲな学問だと言う人がいます。既成のディシプリンの側に立てば当然の話で、私としては、社会言語学はこれから皆で作り上げていく、新しい学問だと思いたいのです。

日本語教育との関連

日本の国際化に伴って、近年外国語を母語とする人で日本語を学ぼうとする人が増加しています。彼らは、日本語を話し聞き読み書きするにあたって、日本語を母語とする人が見過ごしがちな日本語の特徴に気づくことが多いようです。語彙や文法が彼らの母語と違うことは言うまでもありませんが、ハード面以外に、ソフト面での差にも関心を持ち戸惑うことがあるようです。異文化間コミュニケーションの場で生ずる問題に注目が集まっているとも言えましょう。これらに関する外国人の研究例を、思いつくまま挙げてみます。S. White「Back-channels across cultures: a study of Americans and Japanese」'85 (『Language in Society』)、ダニエル・ロング「対外国

人言語行動の実態」'92 (『日本語研究センター報告』)、羅聖淑「韓国と日本の言語行動の違い」'92 (『日本語学』)。

こうした研究が積み重ねられていくことによって、日本語教育は必ずや厚みを増し、役立つものになっていくに違いありません。

日本の社会言語学

最後に日本における社会言語学の最近の動きについて、具体的にどんなテーマに研究者たちの関心が集まっているか、ざっと展望してみることにしましょう。

まず、なんとといっても日本語のバリエーション(変異)についての研究が目につきます。そして言語変異の現れ方として、使用場面、言語意識、敬卑、使用者の年齢・世代、性、職業、出身地などが注目されています。

ついで、談話行動ないしコミュニケーションのありようについての研究があります。語用論(プラグマティクス)、談話分析(ディスコースアナリシス)の名のもとに行われている研究のうちかなりの部分は、ここに含めていいでしょう。関連して、言語運用に伴う随伴行動や非言語行動に関する研究などもあります。

さらに、言語社会をどう捉えるかの研究、そこに起こる言語接触やバイリンガリズムの研究、言語の動態に関する研究、さらに言語政策(言語計画・言語管理)に関する研究などもあります。

そして、日本の国際化に伴って、日本語とそれ以外の言語との間の対照研究(対照社会言語学)が目立つようになってきました。外国籍の研究者の方々の業績を含めて、この種の研究は、今後ますます盛んになっていくと思われます。必ずや日本語教育界にとって有益な研究が展開していくことでしょう。

参考文献

社会言語学一般

- P. トラッドギル、土田滋訳『言語と社会』75年12月 岩波書店
大野晋、柴田武編『岩波講座日本語2 言語生活』77年12月 岩波書店
田中克彦『ことばと国家』81年11月 岩波書店
特集『社会言語学』86年12月『日本語学』5巻12号
特集『シンポジウム社会言語学の理論と方法』88年3月『言語研究』93号
R. A. ハドソン、松下幹秀、生田少子訳『社会言語学』88年11月 未来社
真田信治、澁谷勝己、陣内正敬、杉戸清樹『社会言語学』92年11月 桜楓社
国立国語研究所『場面と場面意識』93年3月 三省堂
ロナルド・ウォードハフ、田部滋、本名信行監訳『社会言語学入門』94年3月 リーベル出版

特集『社会言語学の動向』94年9月『日本語学』13巻10号

言語変異・バリエーション

- 寿岳章子『日本語と女』79年10月 岩波書店
井出祥子『女のことは男のことは』79年11月 日本経済通信社
特集『沖縄方言論争』81年10月『国語通信』239号
特集『高齢化社会の言語生活』82年9月『言語生活』369号
真田信治『日本語のバリエーション』89年2月 アルク
R. レイコフ、かつえ・あきば・れいのるず訳『言語の性』90年6月 有信堂高文社
特集『世界の女性語・日本の女性語』93年5月『日本語学』12巻6号

言語行動・非言語行動

- 特集『あいさつの言語学』81年4月『月刊言語』10巻4号
特集『あいさつことば』85年8月『日本語学』4巻8号
特集『あいづち』88年12月『日本語学』7巻13号
特集『ポディーランゲージの世界』92年1月『月刊言語』21巻1号

バイリンガリズム

- 特集『日本語教育と二重言語生活』83年3月『言語生活』376号
特集『日本のバイリンガリズム』91年8月『月刊言語』20巻8号
ジョン・マーハ、八代京子編著『日本のバイリンガリズム』91年11月 研究社出版

社会言語学関係の文献はかなりの多いのですが、日本語で書かれた単行本と雑誌の特集に限って示すことにしました。分野も限定して、語用論・談話分析・異文化間コミュニケーション、また敬語に関するものは割愛しました。